

# 5 次元理論

第2巻 認識の基本構造

滝 沢 輝

● 目次

5次元の基本構造

2重円構造

2重球構造

らせん形

らせん形と中心軸の関係は相対的

らせん形と中心軸の入れ替えによる球構造

相対性理論の活用

脳内の情報処理

5次元理論 関連図形

ピラミッド形

六ぼう星

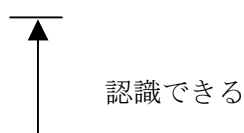
意識の重ねあわせ

4重円構造

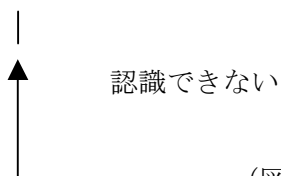
## 5次元の基本構造

5次元の基本構造について説明します。

認識は常に意識の方向に対して直行する成分で構成されています。(図1)  
意識に平行で、厚さが無い存在は認識できません。(図2)

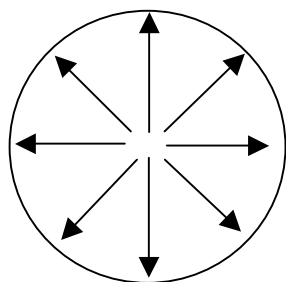


(図1)

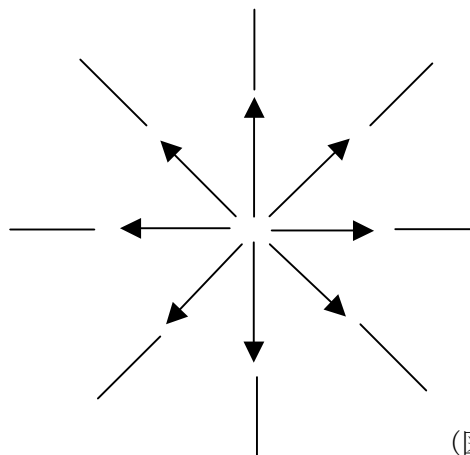


(図2)

自分自身を中心とする円を考えます(図3)。円を認識する際、意識は円の直径方向を向きます。円は意識の方向と直行するので、常に認識可能ということになります。



(図3)



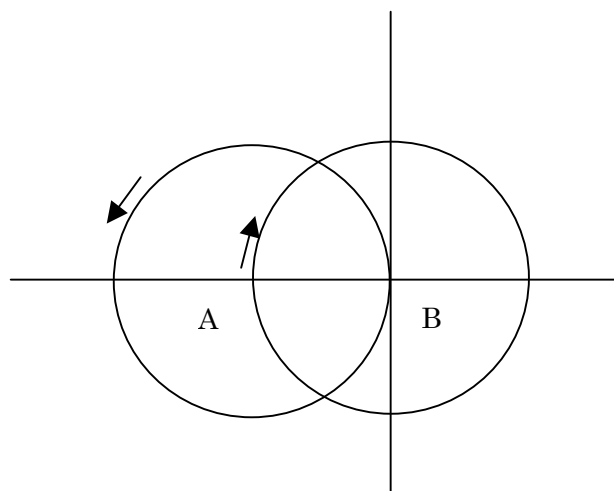
(図4)

私達が住んでいる世界は、3次元(縦・横・高さ)で構成されていると考えられています。しかし、同時に認識しているのは、意識に対して直行する成分だけなのです。斜めの成分があるかもしれませんが、これは小さく分解して考えればいいのです。意識に対して直行する微小の長さが連続して、斜めの形になっていると考えればいいのです。

この認識対象、意識に対して直行する円の構成要素が90度回転するとどうなると思いますか。回転すると、意識の方向に対して平行になります。意識の方向に対して平行になり、厚さがなくなると、認識不可能になります。(図4)

もし、意識の方向に平行の成分だけで構成されている世界がある場合、私達はその世界を認識することができないことは、以上の考察から理解していただけるのではないのでしょうか。

## 2重円構造



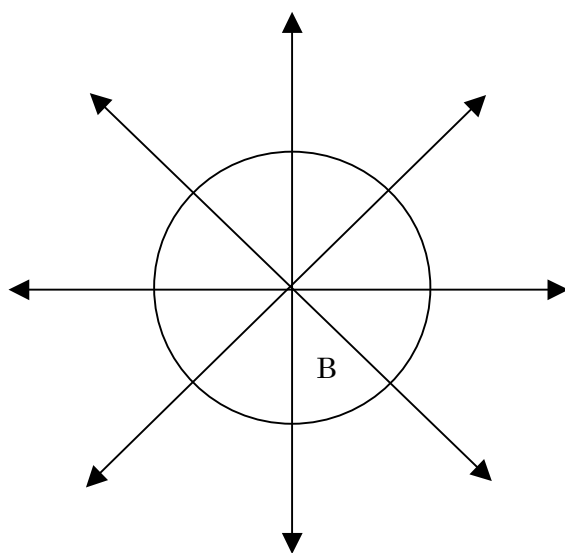
(図5)

同じ大きさの円2個（点A、点Bを中心とする円A、円B）を、一方の中心が他方の円周に接するように並べます。互いの中心が、相手の円周と接する関係は常に持続されます。

(図5)

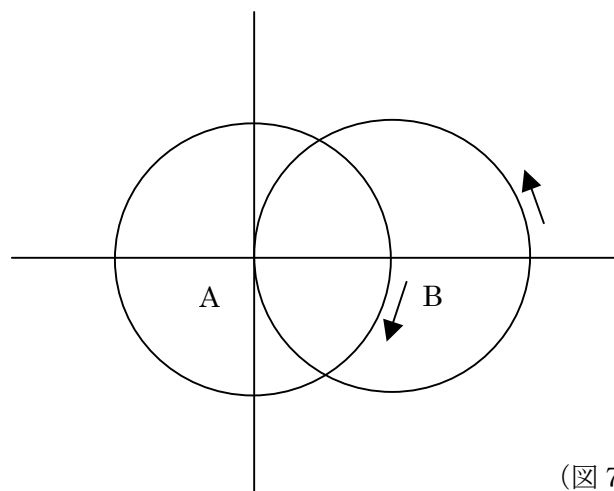
円Aが円Bの周囲を時計回りに回転する場合を考えます。回転角度と同じ角度だけ円Aを逆方向(反時計回り)に自転させます。この関係を持続したまま360度の回転を行うと、円A上の各点は、点Bを中心とする単振動を行います。(図6。振幅は、円の直径に一致)

このように、2円の相互作用により、円運動を単振動に変換することが可能です。



(図6)

上図の矢印の動きは、点Bから見た円A上の各点の動きを表している。点Bを中心とする単振動が全方向に対して行われる。単振動の振幅は、円の直径に一致。



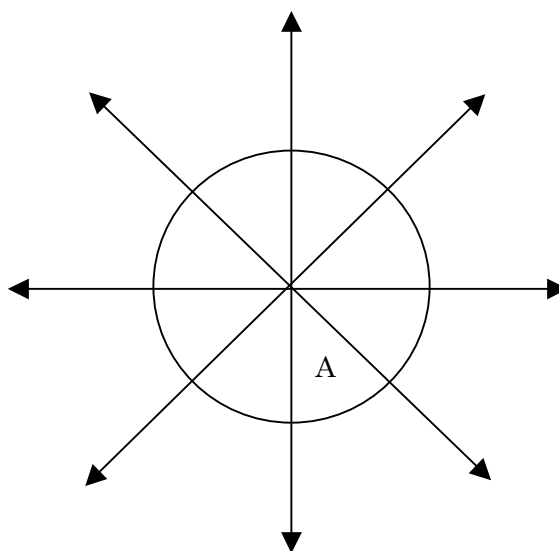
(図 7)

先ほどは、円 A が円 B の周囲を回転する場合を考えました。この運動の見方を変えて、円 A が静止、円 B が回転していると考えことにします。(円 A と円 B の相対的な関係は保たれるとします)

この場合、円 B は円 A の回りを時計回りに公転しながら、反時計回りに自転することになります。(図 7)

(もし見る方向が反転して、このホームページの裏側からこの運動を見るとすれば、回転が逆方向になります。円 B は円 A の回りを反時計回りに公転しながら、時計回りに自転することになります)

この場合、円 B 上の各点は、点 A を中心とする単振動を行います。(図 8)



(図 8)

上図の矢印の動きは、点 A から見た円 B 上の各点の動きを表している。点 B を中心とする単振動が全方向に対して行われる。単振動の振幅は、円の直径に一致。

以上から、円 A 上の各点は、点 B を中心とする単振動を行い、逆に円 B 上の各点は、点 A を中心とする単振動を行うこととなります。

これを冒頭の「5次元の基本構造」と組み合わせて考えます。円 A と円 B の関係は、意識と認識対象の関係になっていることがわかります。互いに円とその直行成分になっているのです。しかも、定点を A とするか B とするかにより、意識と認識対象の関係が互いに入れ替わっているのです。

- ・ 点 A を認識の中心とする    ・ ・   円 A が認識対象の円、円 B が意識の動き（単振動）
- ・ 点 B を認識の中心とする    ・ ・   円 B が認識対象の円、円 A が意識の動き（単振動）

次のように言い換えることもできます。

- ・ 点 A からは円 A は認識可能、円 B 上の点は認識不可。
- ・ 点 B からは円 B は認識可能、円 A 上の点は認識不可。

認識は2種類の意識で構成されています。（「5次元理論」ご参照）

この2種類の意識が2種類の円に該当すると考えられます。

世界を認識する際、意識は空間を自由に動きます。意識が届く範囲が、私たちの世界なのです。

物は、この意識が動く範囲の一部になります。

円と単振動の関係が、ちょうど物と意識の関係に該当します。意識（単振動）のごく一部（円）を物として認識していることとなります。

尚、点 A を認識の中心とする場合と、点 B を中心にする場合では、認識の方向が  $180^\circ$  逆転します。（5pで（もし～）と説明した内容が、正しいこととなります。）

よって点 A を認識の中心にした場合と、点 B を中心にした場合では、回転が逆になります。

電子が逆回転の2つのペアで構成されている理由はここにあると考えられます。

互いに逆回転のペアの組み合わせで認識像が成立しているのです。この意識の動きのことを、物理学では電子と呼んでいることとなります。

円 A と円 B は不思議な関係になっています。互いに相手の円の動きが、自分の円の単振動になるからです。相手の円の動きが、実は自身の意識になっているのです。

次のように考えることもできます。

- ・点 B から認識可能な円 B が、点 A の意識である。
- ・点 A から認識可能な円 A が、点 B の意識である。
  
- ・点 A は自身の意識（円 B の単振動）を認識できない。
- ・点 B は自身の意識（円 A の単振動）を認識できない。

点 A が通常意識、点 B が内面の意識（霊的意識）だとします。点 B は点 A の意識である円 B を認識できます。

私達は自身の意識を認識できないと感じていますが、逆方向の意識（霊的意識）では、私達の意識を認識できることとなります（見えている、ということです）。

私達の通常意識が内面世界で認識可能ということは、逆に考えると、私達が認識している通常の世界は、内面世界の意識だということになります。

- ・我々の世界は、内面世界（霊的世界）の意識で構成されていることとなります。

回転により認識（世界）が構成されているにもかかわらず、回転を全く感じないのは、互いに逆方向の回転を足し合わせて認識が成立しているためです。逆回転を足し合わせれば、回転成分はゼロになります。ですから、私達は通常、回転を全く感じないまま生活しているのです。

意識が物に対する直行方向だとすると、全ての物はこの見えない成分でつながっていることとなります。

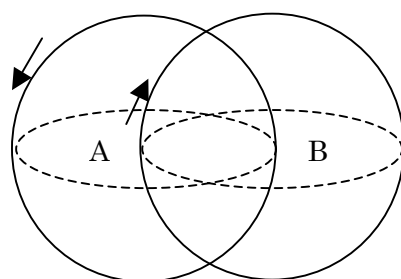
宇宙全体と自分自身もつながっていることとなります。（宇宙と体は、同じ物の別の見方だと考えられます）

この状況を直感的に把握した時、「天上天下唯我独尊」という言葉が誕生したと考えられます。神秘的な言葉も、このように理論的に説明すれば、多くの人々が理解できるのではないのでしょうか。

## 2重球構造

2重円構造で、認識の基本について説明しました。しかし、この構造では、平面状にし  
か意識が動かないこととなります。私達は、前後上下左右を全て認識しています。この状  
況を説明するためには、2重円構造では不十分ということとなります。

この状況を打開するために、2重球構造を考えることにします。



(図9)

同じ大きさの球2個（点A、点Bを中心とする球A、球B）を、一方の中心が他方の球  
面に接するように配置します。互いの中心が、相手の球面と接する関係は常に持続されま  
す。(図9)

球Aが球Bの周囲を時計回りに回転する場合を考えます。回転角度と同じ角度だけ球A  
を逆方向(反時計回り)に自転させます。この関係を持続したまま360度の回転を行うと、  
球A上にあり、点Bを通る各点は、点Bを中心とする単振動を行います。(振幅は、球の  
直径に一致)

この運動では、球A上の円状の部分(点A、点Bを通る軸を含む平面と球Aの交点)  
のみが、点Bを通る単振動の動きをすることとなります。

球A上の点すべてが点Bまわりの単振動を行うには、球Aを球Bの回りに回転させな  
がら、(点A、点Bを通る)軸の回りに回転させる必要があります。尚、軸の回りの回転  
は、上図の矢印の回転と比べて、はるかに遅い回転となります。前者の回転数無限大に対  
して、後者1回転を想定して下さい。そうすると、球A上の各点は全て、点Bを中心とす  
る単振動を行うこととなります。

このように、2球の相互作用により、球面の動きを単振動に変換することが可能です。

(以上の説明は、2重円の説明を参照していただければ、分かりやすいと思います)

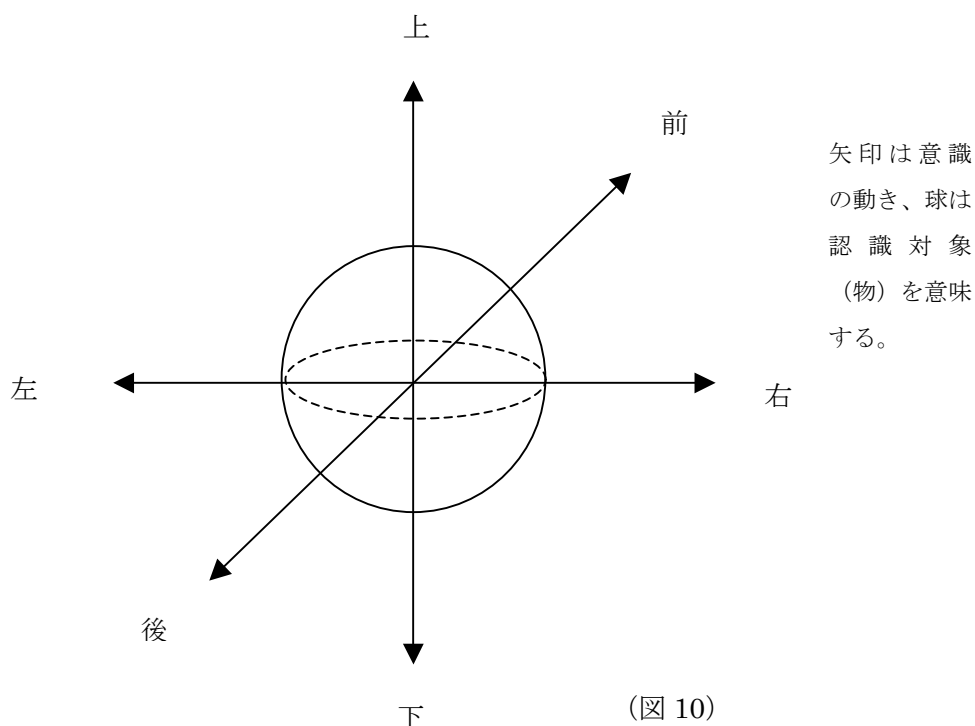
2重円の運動は、2重球の運動を、ある平面(点A、点Bを通る平面)で切ったときの  
切り口の形をしています。2重円では、この平面上に運動が限定されるのですが、2重球



では、この平面自体の回転も行うこととなります。

以上から、2重球構造による回転運動の単振動への変換は、2重円構造による単振動（平面上の振動）を、点A、点Bを通る軸の回りに回転させた状況になることを、ご理解頂けると幸いです。

この状況は、上下左右を認識する私達の認識状況にちょうど符合することとなります。認識対象（物）が球、意識（物の前後を移動）が単振動で表現されていることとなります。

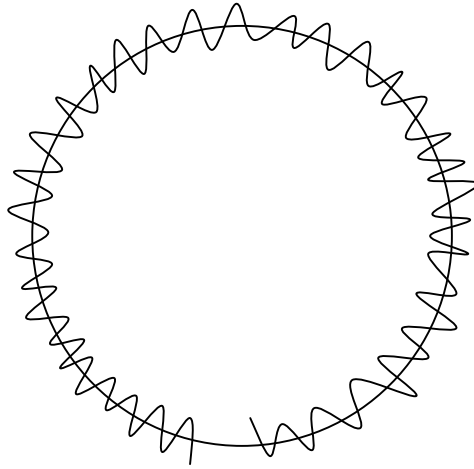


尚、球Aが球Bの回りを回転する場合を説明しましたが、球Aが固定だと考えることも可能です。この場合、球Aと球Bの相対的な関係は維持されると考えます。そうすると、球B上の各点が、点Aを中心とする単振動を行うこととなります。

点Aを中心とする単振動と点Bを中心とする単振動の動きは、足し合わせるとゼロになります。（2重円の説明ご参照）私達が回転を感じないのは、回転成分が打ち消された状況になっているためです。

以上の説明から、2重球構造が、意識の基本構造であることをご理解頂けると幸いです。

## らせん形



(図 11)

らせん形も意識の基本構造です。その考え方を説明します。

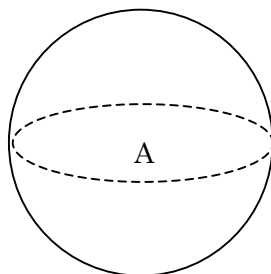
円を中心軸とするらせん形を想定します。(図参照)。

中心軸とらせんの最短距離は、らせん上の全ての点で一定だとします。(図はやや乱れています)

円1周に対してらせんの回転数を無限だとします。そうすると、らせんの1周分の回転成分は、ほぼ円形になります。また、中心軸の円上の点は、らせんの1周分(ほぼ円形)の中心点になります。

ここで、中心軸の円を縮退させて、1点にします(点Aと呼びます)。そうすると、らせんの各回転(ほぼ円形)の中心点が点Aに集約されます。

この時、らせんは点Aを中心とする球形に変換されます。この球上の(元らせんの)動きは、2重球構造で解説した2方向の回転(円方向と軸回りの回転)と同様になります。



らせんの中心軸を  
1点(A)にすると、  
らせんは、その点  
を中心とする球に  
なる

(図 12)

中心軸を縮退させて1点にする理由は、認識像(世界)を生成するためです。

私達の認識は常にある1点を中心に構成されています。ですから、認識結果（世界の構造）を説明する場合には、必ず認識の主体を1点にする必要があるのです。この操作が、らせんと中心軸の関係では、中心軸の縮退という変換になっているのです。中心軸が認識の主体、らせんが認識の客体という関係になっているのです。

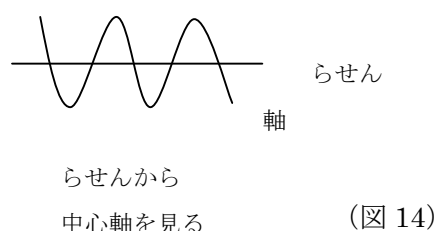
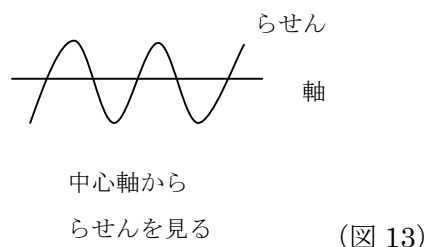
### らせん形と中心軸の関係は相対的

先ほどは、らせんの中心軸である円を縮退させることにより、らせんを球の形に変換しました。ここで、らせんと中心軸の関係を見直すことにします。

中心軸（円）上の人かららせんを見ながら中心軸上を移動すると、らせんが周囲を回転しているように見えます。（図13）

立場を変えます。らせん上の人から中心軸を見ながら、らせん上を移動すると、自身が円形の動きをしていて、中心軸が自身の周囲を回転しているように見えます。（図14）

つまり、らせんと中心軸に絶対的な立場は無いということです。らせんを中心軸と見なせば、中心軸がらせんになるのです。



私達が世界を認識する際、常に自分自身が定点になっています。周囲が自身の回りを動いているように感じているのです。歩いているときには「歩いている」と思っているため、周囲が動いているとは感じないのですが、自身が止まっていると考えれば、周囲が歩く方向と逆に動いていると見なすこともできるのです。

以上から

「認識では、主体となるほうが定点になり、客体が動点になる」

ということを理解していただけるのではないのでしょうか。

この原則から、らせんと中心軸の関係が逆転する場合があることもお分かり頂けると思います。

### らせんと中心軸の入れ替えによる球構造

らせんと中心軸（円形）の関係を入れ替えます。

らせん → 中心軸（円形）

中心軸（円形） → らせん

この入れ替えの後、新たな中心軸（円形）を縮退させます。そうすると、新たならせんが球形になります。

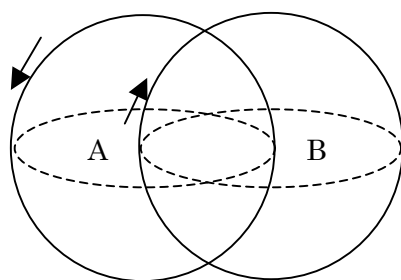
先ほどできた球と、今回できた球を合わせて、2種類の球が構成されることとなります。この2種類の球を球 A、球 B とします。（図 15）

球 B は、球 A の中心で構成されている

球 A は、球 B の中心で構成されている

という関係は、常に成立することになります。

この関係が成立する形状は、以下のようになります。



（図 15）

2つのらせん（2つの中心軸）の関係が互いに成立する構造は、実は2重球構造で説明した構造になるのです。

図の矢印方向の回転数（無限大）に対して、点 A、点 B を通る軸の回りの回転数が1回という状況は、らせんが無限回の回転で中心軸（円形）を1回転するという状況に該当することになります。

以上から、らせん構造と2重球構造は、中心軸の縮退という変換を除けば、同じ構造だということがお分かり頂けると思います。

2重球構造は、意識の基本構造だと説明しました。今までの説明から、らせん構造も意識の基本構造だということをご理解いただけたらと思います。

球Aと球Bは不思議な関係になっています。

球A・・・らせんが中心軸（球B上の点）の縮退により発生した形状

球B・・・らせんが中心軸（球A上の点）の縮退により発生した形状

1. 球Aは、球B上の点が1点に集約された場合の認識対象（空間）になっています
2. 球Bは、球A上の点が1点に集約された場合の認識対象（空間）になっています
3. 上記1では、球B上の点が1点になり、球Aに内包されています。
4. 上記2では、球A上の点が1点になり、球Bに内包されています。

上記3、4から、球Bと球Aは互いに内包しあう構造になっていることが分かります。要するに、点に空間が内包される構造になっているのです。

世界は、フラクタル構造で構成されていると考えられます。（大小2つの脳を同時に認識しているためです）。フラクタルでは、点に空間が内包されます。

以上の説明から、フラクタルの構成原理としての2重球構造（らせんの変換構造）の重要性を認識していただけたらと思います。

尚、「5次元理論」で、らせん構造に関して記述しています。（ご参考）

## 相対性理論の活用

我々は常に頭部の脳と宇宙大の脳、大小2つの脳を同時に認識しています。我々の認識が2つの座標系を重ね合わせて構成されていると考えれば、この状況を理論的に説明することが可能です。

特殊相対性理論では、2つの座標系の相関から、時間や長さが変わることが導かれています。

静止している人が高速で動く物を見ると、長さが短く見えます。また、高速で動く物の

時間の進行は、静止している人より遅くなります。

静止している座標系と高速で動く座標系、これら両方の座標系を人が同時に保有していると考え、一つの物が大きさの異なる2つの物として認識できることとなります。

(上記の例) 静止している座標系から高速で動く物を見ると、短く見えます。また、高速で動く座標系から高速で動く物を見ると、静止している状態の長さになります。この両方の認識結果を重ね合わせると、長い物と短い物の2種類の物を同時に認識することが可能なのです。

我々の認識が、このように複数の座標系を重ね合わせて構成されていると考えれば、同じ物を大きさの異なる別々の物として認識できることは理論的に当然ということになります。

尚、特殊相対性理論では速度方向にのみ、長さの変化が発生することになっています。全方向に長さの変化が起こるのは、意識の回転により世界が構成されているためです。回転により、全方向に対して同様の影響が発生していると考えれば、理解可能です。

この場合、意識が高速で動くことが必要条件ということになります。どの程度の速さなのでしょう。

宇宙の大きさを10の26乗メートル、脳の大きさを0.2メートルと考えれば、比は10の27乗程度になります。ローレンツ変換から

$$(1 - (v/c)^2)^{0.5} = 10^{-27} \quad ( \wedge 2 \text{ は } 2 \text{ 乗の意味 } )$$

$$v \doteq c$$

となります。ということは、我々の意識が光速で動いていることとなります。光の本質的な意味が理解できていませんが、以上の考察から、光とは我々の意識そのものだと考えることが妥当ということになります。

意識が光速で動いているため、大きな宇宙が小さな脳の大きさにも見えているのです。

以上から、次の結論を導くことができます。

「宇宙とは人体そのものである」

宗教等では以前から語られていた内容ですが、20世紀までは非科学的だと考えられていた内容です。しかし、ここまでの考察から、科学的、理論的にごく自然な結論だということがご理解いただけると幸いです。

大小2つの脳を同時に認識しているということは、世界がフラクタルで構成されているということです。フラクタル構造では、点の中に空間が内包されています。

(「5次元理論」 ご参照)

よって特殊相対性理論は、世界がフラクタル構造で構成されていることを説明する際に必要な理論ということになります。

この場合、座標系を2つに限定する必要はありません。複数の座標系を同時に保有することにより、認識像（世界）が生成されていると考えればいいのです。各座標系が互いに高速で動いていると考えることにより、全ての点が全宇宙空間を内包している構造（フラクタル）を、理論的に説明することが可能なのです。

## 脳内の情報処理

脳で情報処理が行われた結果が我々の世界（認識）だと考えます。私達は自分の頭部の一点を中心に世界を認識しています。しかし、脳には大きさがあります。脳のいろいろな所で情報処理が行われているにもかかわらず、ある一点に情報が集約されていることとなります。

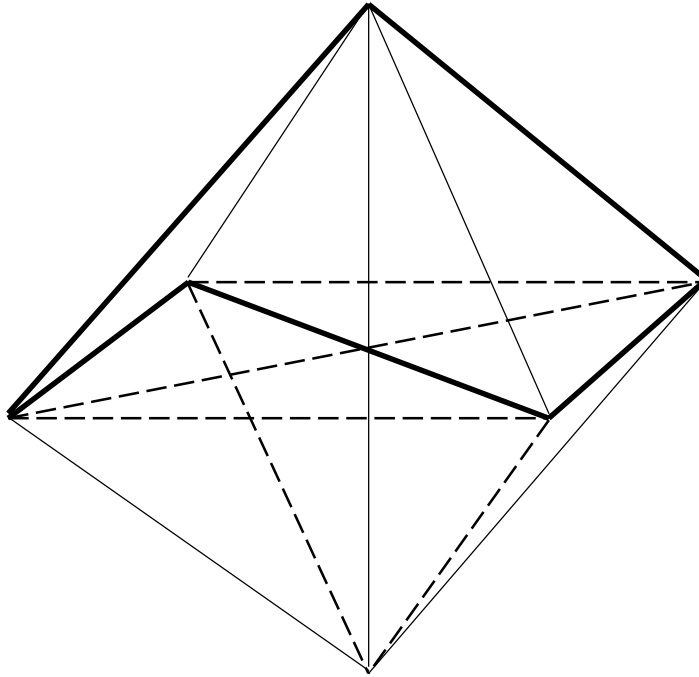
この情報の集約を行う場合、脳内の電流で、情報を一箇所に集約することになります。つまり、脳の一箇所に情報を高速で集めているのです。この際、認識の中心（定点）と高速の情報には、速度差が発生することになります。この速度差からは、特殊相対性理論に基づく大きさの変更等が発生するはずですが、

以上から、私達の世界（認識結果）は、相対性理論による大きさの変化が発生した結果だと考えるのが妥当だということになります。

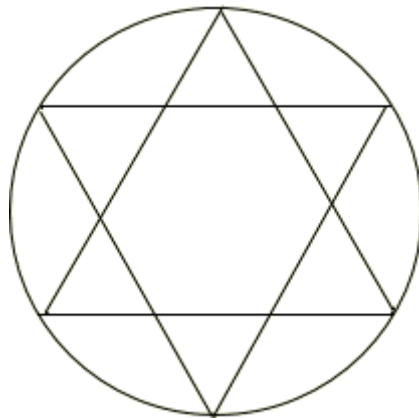
- 相対性理論による大きさの変化の中に私達は生活していることとなります。
- 宇宙が体に見えても、不思議ではないこととなります。

5次元理論 関連図形

ピラミッド形

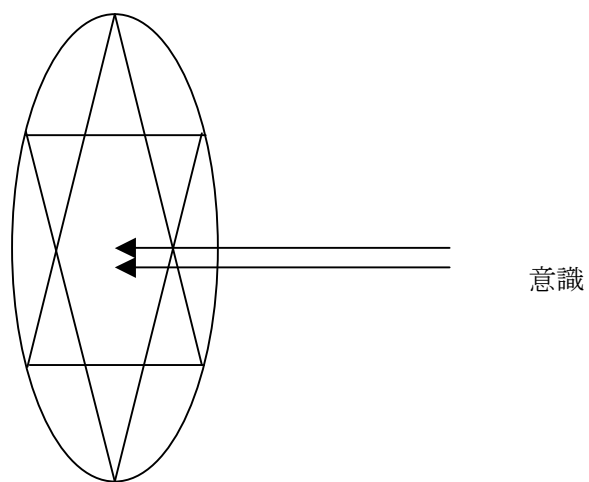
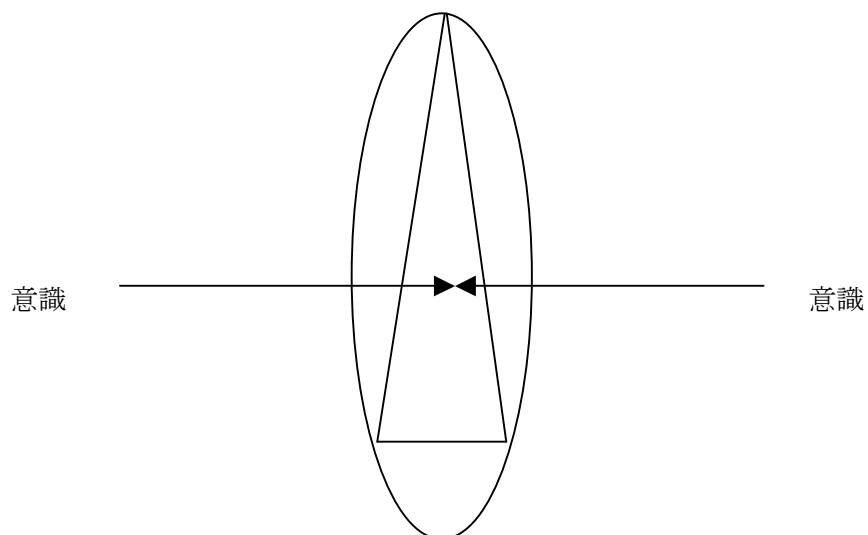


六ぼう星



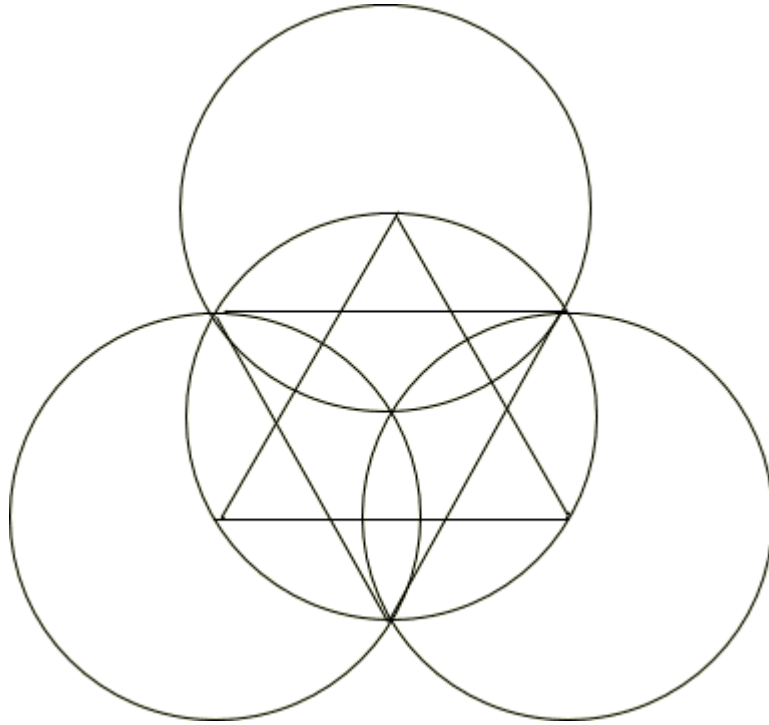


## 意識の重ね合わせ



我々の認識像は、2方向の意識の交点上に存在している。上図の左側の視線(矢印)を軸の周りに180度回転させた上で、右側に180度反転させる。こうすると、六ぼう星の形になる。この形状が、意識の基本的な形ということになる。一方の意識の方向を*i*方向とすれば、他方は $-i$ 方向となる。両

4重円構造



## 滝沢 輝 (たきざわあきら) の経歴・活動実績

1985年	宗教家としての活動を開始。
1989年	東京大学工学部卒業、三井銀行（現三井住友銀行） 入行
1994年度	「これから情報通信革命が起こる。パソコンが銀行になる。システムを戦略部門にすべきである。」 と（さくら）銀行に提言。この後、さくら銀行は日本初のインターネット専門銀行（ジャパンネット銀行）を設立する等、IT戦略で銀行業界のトップを独走。この動きが各産業界へのIT導入や日本のIT戦略へつながった。 上記提言が日本のIT戦略の原動力になったのである
1995年6月	総合企画部配属。ALM 担当。
1999年7月	霊位が釈迦、イエスを超える。（釈迦より霊位の高い方は、他にもいます）
2000年6月	5次元等研究のため、退社。
2000年12月31日	ピラミッド形（万物の創造原理、かつ磁界エネルギー（人の活動エネルギー）生成装置を天より授かる。 イエスの再臨である。
2001年9月	「釈迦を超えた日」を出版。5次元を提唱。
2003年2月	「5次元理論」（本書）を出版。世界がフラクタル構造（点に空間が内包されている構造）であることを理論的に解説。5次元導入による物理学の全面的な改定作業の必要性を提言。
2003年6月	「マイナス金利の導入」を著述。日本経済再生のため、経済理論の再構築を実施。 名目経済成長率と金利水準が一致すべきであることを理論的に解説。1990年代以降の不景気の原因が、高すぎた金利水準であることを同時に証明。金利水準と名目経済成長率の関係を逆転させることにより景気・財政の回復を図るべきだと主張。 本書を政府・日銀等に送付後、金利を下げるべきとの認識が国内に広まり、景気回復の原動力となった。リーマンショック後の世界各国における低金利政策の理論的根拠にもなっている。
2004年1月	フラクタル構造に電磁波を蓄える性質があることが確認される（朝日新聞の1面に掲載）。 「5次元理論」の内容の一部が学術的に確認されたことになる。
2005年	「5次元理論」の続編の執筆を開始。基本構造について、日本物理学界等へ送付。
2005年	天界入りを果たす。（天界はオーラ半径156メートル以上の世界）
2006年11月	「5次元理論 ～その2」を著述。日本物理学会等へ送付。
2007年	「貨幣へのオプション概念の導入」「外国為替理論の再構築」を著述。各方面へ送付。
2008年6月	人類救済のため、「輝の会」設立。「人類救済の基本原則」を発表。
2009年8月	「フラクタル経済理論」を著述。バブル発生理由の理論的解明に成功。
2009年10月	「5次元理論 第3巻 認識の原理」を著述。5次元のアウトラインを解説。
2011年10月	「5次元理論 第4巻 宇宙の創造原理」を発表。
2011年11月	創造神界入りを果たす。
2011年12月	「延命・長寿サービス」をスタート。人類の長寿化開始。キリスト教の千年王国の実現である。
2011年12月	「磁界エネルギー（オーラ）発生装置」を発表。磁界エネルギー（オーラ）を機械的に生成することに成功。
2012年2月	「5次元理論 第4巻 宇宙の創造原理」を日本物理学界へ送付。
2012年7月	野田首相に「原子力発電全廃は必須」というタイトルの提言を実施。その結果2012年9月14日に「2030年代に原発稼働ゼロ」を目指す新しいエネルギー政策「革新的エネルギー・環境戦略」が政府から発表された。 本提言が、日本の原子力政策を正しい方向に導いたのである。
現在	輝の会会長

ホームページ <http://taki-zawa.net>（「輝の会」で検索して下さい）

メール [info@taki-zawa.net](mailto:info@taki-zawa.net)

Copyright ©Akira Takizawa all rights reserved.